教材活用例（３）「百試千改の夢」

〔小学校高学年　主題：郷土への思い　内容項目：４の（７）〕

（１）開発資料の実際

ア　素材の説明

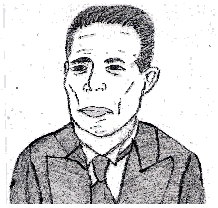
（ア）素材の概要

〈素材　西条の酒造りと三浦仙三郎（みうらせんさぶろう）さんについて〉

古来より，東広島市西条町は，山陽道の中核地で本陣を擁する宿場町であった。そのため，古くから酒造りが盛んで，西条を中心とするその周辺地域にも多くの酒蔵があり，酒造りが盛んに行われていた。当時のこの地域の酒造りは，全国的にも有名な酒の銘産地である灘の酒造りをまねて行われていた。酒の味は灘の酒からは程遠く，「広島はおいしいお酒のないところ」と言われていた。

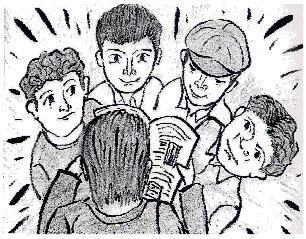
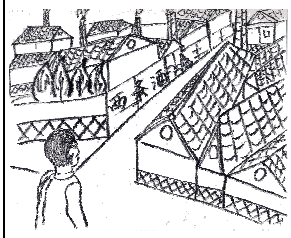
明治に入ると酒造業に参入する鑑札制度が緩和され，誰でも酒造業に参入することができた。雑貨問屋を営んでいた仙三郎も弟に家業を譲り，酒造業に専念するようになる。当初，酒造りはうまくいかず，自ら灘で修業したり，杜氏を替えたりして酒造りの研究に励む。ある講演会で水の違い教えられ，さらに自己研究を進め，20 年余りの年月をかけて，「軟水による醸造法」を開発する。製造法を県内の同業者に無料で配布したところ，第１回全国清酒品評会で１位，２位を広島の酒が受賞する。広島における酒造業の発展に尽力をするが，61 歳で帰らぬ人となる。

弘化 4年（1847年）	三津村の雑貨問屋清水屋の長男として誕生する。
明治 5年（1872年）	仁方村の医師碓井文節の長女園と結婚する。
明治 9年	酒造業へ参入する。
明治10年	初仕込みに酒が腐造に終わる。
明治13年	蔵を新築する。
明治16年	自ら蔵人として灘で修行をする。
明治19年	創業以来の杜氏を更迭し，新しい杜氏を雇う。
明治26年	京都の酒造家大八木正太郎から硬水と軟水の違いを聞く。
明治31年	百試千改の努力の末，「改醸造法実践録」が完成し，三津町長に就任する。
明治40年	第１回清酒品評会で広島の酒が優等1位，２位を受賞する。
明治41年	町役場からの帰り道に倒れ，不帰の客となる。享年61歳。



（イ）４コマ絵

史実に基づいて経歴を整理した。そして，仙三郎の考え方や生き方が表れ，人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面として構成し，起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	西条は，日本三大名醸地の１つで，現在も酒造りが有名である。しかし，明治の初めには衰退したときがあった。 西条の酒造り復興には三浦仙三郎の酒造りにかける努力と郷土を思う気持ちが大きくかかわる。	仙三郎の酒造りにかける努力が始まる。自分で調べたり，自ら蔵人となって学んだりした。軟水と硬水の違いを知ってからは，軟水でもおいしい酒が造れる方法を創り出すための研究が20年続く。	20年もかけて考え出した軟水による醸造法を惜しげもなく，県内の同業者に本にまとめて無料で配った。 仙三郎のこの行動が広島県の酒造りの復興につながり，西条が現在も日本三大名醸地として存在している。	現在もなお酒造りが盛んな西条。酒祭りの開催へと大きく発展し，伝統文化として地域に根付いている。

イ　資料の解説

【作成の要点】

今回の資料は，郷土の酒造業復興のために，努力を重ねる三浦仙三郎の姿を通して，郷土に誇りをもち，大切にしていこうとする態度を育てることをねらいとして作成した。

高学年の内容項目の指導の観点を踏まえ，郷土の伝統や文化を知り，郷土を愛する心をもつことから，その心が日本全体に開かれたものへと発展し，国を愛する心が児童の内面から自覚されることをねらった。そこで，初めは郷土の酒造業を発展するために努力を重ねる仙三郎が，20 年の歳月をかけて「軟水による改良醸造法」を完成させた後，この方法を本にまとめ，自分の蔵と同じように困っている同業者に無料で配布する場面を中心に置き，郷土の発展に尽くすだけでなく，郷土を愛する心が西条から広島県全体へ，そして全国へと発展していくことを児童に感じさせることを目標に作成した。

児童は，三浦仙三郎という人物を通して，初めは自分の蔵のため，地域の蔵のために始めた努力が，やがて西条や広島県全体の蔵のためにと広がり，全国へと発展していく考え方の変化や生き方を学ぶ。その中で，自己の生き方について考えを深め，自分も郷土に生きる一人としてその伝統や文化を継承し，発展させていく責務があることを自覚し，そのための努力をしていこうとする心構えを育てることができる内容にした。

また，総合的な学習の時間や社会科との関連を図り，地域学習として調べ学習や聞き取り学習，地理的な学習へと発展させることも可能である。

さらに，素材が児童にとってはなじみの薄い「酒」ではあるが，日本三大銘醸地という地域ならではの特徴を生かし，家庭でお酒について家族と話したり，直接酒蔵へ聞き取りに行ったりして家庭や地域を巻き込んで学習を進めることもできる。

【心に響くちょっといいはなし】

酒造りは全国各地で行われているが，当時は灘，伏見を中心とする硬水を使って製造するお酒が有名であった。広島でも酒造りが行われていて，明治に入る前は交通も発達しておらず，地元の酒も売れていた。しかし，明治に入ると交通が発達し，広島でも灘や伏見の酒が手軽に味わえるようになってきた。灘の酒を飲んだ庶民は，そのおいしさに灘の酒を買うようになり，広島の酒は衰退の一途をたどることになった。仙三郎が酒造業に参入したのはちょうどそのころであった。その時の仙三郎の考えとしては「酒造業は儲かる，酒造業に参入するには規制が緩くなった今がチャンスだ」というものであったに違いない。スタートの時点では，「自分のための酒造り」だったのである。しかし，いざ酒造りを始めてみると，そう簡単においしい酒が造れない。腐造が続く中，財産をつぎ込み酒造りにのめりこんでいく。ふつう酒造りのことは杜氏や蔵人に任せ，経営者は口をはさまないものであるが，仙三郎は違った。自ら，蔵人になり灘で酒造りを学んだり，水の違いを知った講演会に出かけたりと努力を重ねた。様々な経験を通して，酒造りの研究だけでなく，「杜氏の育成が重要だ」と気付いた仙三郎は，晩年，杜氏の育成に力を注ぐようになる。ここが，仙三郎の生き方の偉大なところである。仙三郎の開発した「軟水による改良醸造法」の技術と酒造りの心意気を身に付けた杜氏は，「広島杜氏」と呼ばれ，要請があれば全国どこへでも行ったという。このことにより，全国各地の軟水による酒造りも改善され，「広島杜氏」の名は，全国にとどろくこととなったのである。

ウ　資料全文

百試千改の夢

ぼくの町には，白壁に囲まれた酒蔵がある。寒冷な気候，良質の米と豊かな軟水(1)のそろうこの町は，酒都西条として，日本三大名醸地(2)と言われている。ぼくたちは，今，自分の町について学習をしている。今日は，酒蔵の方にお話を聞きに来ているのだ。

「いつごろから酒造りが盛んだったのですか。」

「ずいぶん昔からだと聞いているよ。しかし，明治の初めには一時衰退していたらしいんだよ。」

「どうして，今のようにお酒が有名になったのですか。」

「それには，どうしても欠かせない一人の男がいるんだよ。」

ぼくは，その人のことが気になった。すると，酒蔵の方がゆっくりと話し始めた。

その人の名は，三浦仙三郎。彼は，弘化４（1847）年三津村（現在の東広島市安芸津町三津）に生まれた。

その頃は，仙三郎の生まれた三津村はもちろん，県内のどこでも灘(3)の製法をまねて酒造りをしていた。しかし，製法をまねただけではおいしい酒はできず，広島は，おいしい酒のないところと言われていた。それが，仙三郎が大人になる頃には交通の便が良くなり，灘などの名酒が手軽に味わえるようになった。そのため，三津村の酒が，あまり売れなくなった。仙三郎が酒造りをはじめたのは，ちょうどこの頃だった。

最初に仕込んだ桶から，かぐわしい酒の香りがただようはずの時期なのに，それどころか酸い嫌な臭いがする。失敗であった。仙三郎の初めての酒造りは，情けない腐り酒から始まった。

仙三郎は，酒造りを再開したが，なかなか質の良い酒ができない。醸造法(4)の改良を試しても，造った酒が腐ってしまう年が続いた。酒造業にとって失敗は三年続けばお金持ちでも資金が尽きるといわれるほど，最悪なことだった。（失敗するには何か理由があるはずだ。）挫折感の中で仙三郎は考えた。事業をやめるという方法もあったが，仙三郎は原因を追及し，本格的な醸造法の改良をめざした。仙三郎は自ら従業員を指揮して，失敗の原因となるものを探した。全財産をつぎ込んで酒蔵の全てを新しくしたり，灘の酒造家を訪ね，自ら蔵人(5)となって酒造法を学んだり，自分の指揮に従う杜氏(6)を雇い直したりとあらゆる手を尽くした。

次に雇った杜氏は，若く経験は乏しい代わりに，仙三郎と心をひとつにして新しい酒造りに挑もうという研究心に燃えていた。若い杜氏とともに一からやり直すうちにようやく改良の糸口が見えてきた。

明治 26（1893）年の秋，仙三郎があ然とする衝撃の事実が判明した。それは，酒造りに関する講演会でのことだった。

「酒造の第一の問題は水である。広島の水と灘の水は違っている。水質が違っているのに同じ醸造法ではいい酒ができるわけがない。」

早速，地元の水を調査し，灘は発酵(7)作用が高い硬水(8)，三津村は発酵しにくい軟水であり，二つの水は全く性質の違うことが分かった。灘に学ぶことはできない。仙三郎は，軟水に適する方法を求め，原料配合の加減など一から実験を繰り返した。そして，ついに「軟水による改良醸造法」を完成させたのである。醸造法の改良に取り組んでから 20 年以上が経っていた。仙三郎の酒蔵では，この方法によりおいしい酒ができるようになった。

「長い年月をかけて，ようやく完成させたんですね。」

「『百試千改』という言葉を知っているかい。百回試して，千回改める。仙三郎さんの言葉だよ。」

「それだけの思いを込めた醸造法なのですね。」
「そして，明治 40（1907）年の第１回清酒品評会[9]で出品数 2138 点中，５点しか選ばれない優等のうち，１位と２位に仙三郎の考えた醸造法で造られた広島の酒が選ばれたんだ。」
「仙三郎さんの苦労は，ようやく実を結んだということですね。」
「でも，選ばれた広島の酒は，仙三郎さんの蔵の酒ではないんだ。」
「えっ。」
「仙三郎さんは，自分が考えた造り方を一切隠さなかったんだ。詳しく本にまとめて，地元の三津だけでなく，西条，さらには県内各地の酒蔵に無料で配ったんだよ。」
（どうして，無料で配ったりしたんだろう？）
ぼくは，仙三郎さんに思いをめぐらせた。
「仙三郎さんのおかげで，今があるんだよ。」
酒蔵の方がぽつりと言われた。

ぼくは，酒蔵の方にお礼を言い，酒蔵をあとにした。帰り際，もう一度，酒蔵の町並みを眺めてみた。
「今日も豊富に湧き出る軟水でおいしい酒が造られている・・・。そうか・・・。」
ぼくは，無料で配った仙三郎さんの思いが伝わってくるような気がした。赤いレンガの煙突から立ち上る煙を見ながら，ぼくは自分の住むこの町のこの見慣れた景色が新鮮に映り，こんなことを考えながら，軽い足取りで家路へとついた。

（明治の初めに誕生した仙三郎さんの新しい酒は，百年の時を越え，現在も酒都西条の酒として生きている。）

【注】

(1) 水に含まれている成分としてのカリウムやカルシウムが少ない水。軟水で仕込めば甘口のお酒になりやすい。
(2) 酒造りの名立たる名産地。兵庫の灘，京都の伏見，広島の西条が日本三大名醸地と言われている。
(3) 清酒の主生産地である神戸市東部から西宮市今津に至る大阪湾に面した約12km に及ぶ沿岸地帯。
(4) 発酵・熟成などの作用によって，酒・みそ・しょうゆなどをつくるやり方。
(5) 杜氏の指揮のもと，酒造りに従事する酒造りの職人。
(6) 酒造りにおける現場の最高責任者。蔵の管理，帳簿管理，醪の仕込みと管理などを行う。
(7) 酵母や細菌などの微生物がエネルギーを得るために有機化合物を分解して，アルコール類・有機酸類・二酸化炭素などを生成していく過程。
(8) 水に含まれている成分としてのカリウムやカルシウムが多い水。硬水で仕込めば辛口のお酒になりやすい。
(9) 日本酒のよしあしを決める会。（日本酒の事を酒税法上では清酒と言う。）明治 40 年から昭和 25 年まで1年おきの秋に開催された。

【参考文献】

池田明子・秋山裕一（2001）『吟醸酒を創った男「百試千改」の記録』時事通信社
日本電信電話ユーザ協会　広島支部 web サイト　（http://www.hiroshima.jtua.or.jp）
『ひと風土記　第十二回　三浦仙三郎』

エ　授業展開例　－学習指導案（略案）－

仙三郎の生き方を通して地域の伝統文化へつなげる展開Ａ
～　仙三郎の生き方を第三者としての主人公を通して考える指導　～

（ア）**主題名**　郷土への思い　４－（７）

（イ）**ねらい**　郷土の酒造業復興のために努力を重ねる仙三郎の姿を通して，郷土に誇りをもち，大切にしようとする心情を育てる。

（ウ）**資料名**　「百試千改の夢」

（エ）**学習指導過程**

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 （☆評価の観点）
導入	１　酒について知る。	○　お酒はどうやってできるか知っていますか。 ・米から作る。	○　お酒の造り方を簡単におさえ，本時の資料への方向付けをする。
展開	２　「百試千改の夢」を読んで，話し合う。	○　地酒の需要が減って，地元の酒造りが衰退したとき，仙三郎はどんな気持ちだったでしょう。 ・三津の酒造りを盛んにしたい。 ・売れるお酒を造って地元を何とかしたい。 ○　「軟水による改良醸造法」を完成させたとき，仙三郎はどんな気持ちだったでしょう。 ・あきらめずに続けてきてよかった。 ・これでおいしい酒が造れる。 ◎　仙三郎が二十年以上もかけて完成させた「軟水による改良醸造法」を文書にまとめ，県内の同業者に配ったことを聞いたぼくは，どんなことを考えたでしょう。 ・どうして苦労して完成させた醸造法を教えたのだろう。 ・広島の酒全体のことを考えたのかな。 ○　赤れんがの煙突から立ち上る煙を見ながら，ぼくはどんなことを考えたのだろう。 ・仙三郎さんが軟水醸造法を教えたおかげで，広島の酒が今もあるんだな。 ・仙三郎さんのような人がいるぼくの町って素敵だな。こんな町が好きだな。	○　その場の状況が分かるように，場面絵と説明の短冊を示しながら読み進める。 ○　灘の硬水と広島の軟水の違いを理解させるために，軟水と硬水を実際に飲ませる。 ○　改良醸造法を完成させるまでの努力を短冊を使って提示し，状況把握をさせる。 ○　情報公開することで，広島県全体でおいしいお酒が造れるようになったことをおさえる。 ☆　地域全体のことを考える仙三郎の考え方を通して，集団や社会とのかかわりを踏まえ，自分なりに思考を深めることができたか。 ○　今も続く酒造りの営みを感じながら，郷土への誇りと愛着の気持ちをもたせる。
	３　自分を振り返る。	○　自分たちの町や地域で誇れるものは何ですか。そんな町や地域をどう思いますか。 ・誇れるものがたくさんあって，うれしい。この町が好きだ。	○　様々な視点から，たくさん出させる。
終末	４　心のノートに考えたことを書く。	○　心のノート PP.104～105 を開けましょう。	○　心のノート PP.104～105 を読み，ふるさとについて書かせる。

仙三郎の生き方に焦点を当て，夢をかなえるまでの努力を考える展開Ｂ
～　仙三郎の生き方そのものを通して，粘り強くやり抜く姿を考える指導　～

（ア）主題名　あきらめない心　１－（２）

（イ）ねらい　どんな困難に出会っても成功するまで努力を続け，新しい酒造法を作り上げた仙三郎の姿を通してあきらめずにやりぬこうとする心情を育てる。

（ウ）資料名　「百試千改の夢」

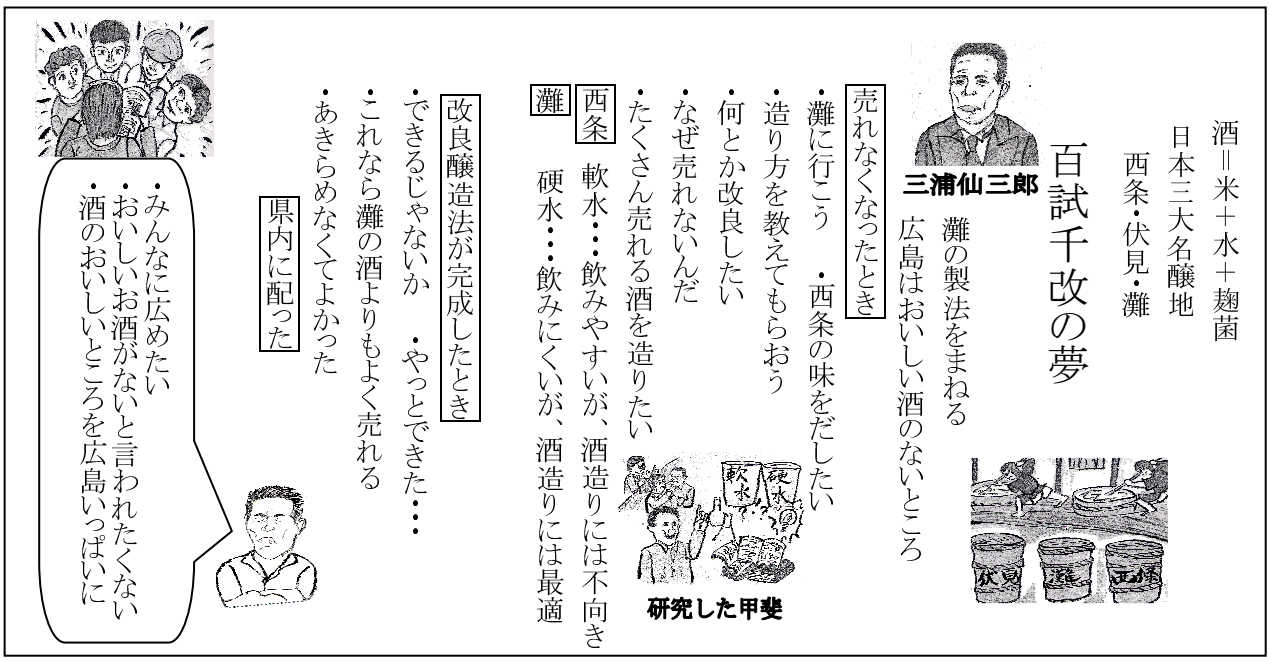
（エ）学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 （☆評価の観点）
導入	１　酒について知る。	○　お酒はどうやってできるか知っていますか。 ・米から作る。	○　お酒の造り方を簡単におさえ，本時の資料への方向付けをする。
展開	２　「百試千改の夢」を読んで，話し合う。	○　地酒の需要が減って売れなくなってきたとき，仙三郎はどんな気持ちだったでしょう。 ・このままでは，生き残れない。 ・売れるお酒を造りたい。 ○　やめるという方法もあったのに，なぜ，仙三郎はあきらめなかったのでしょう。 ・ここであきらめたら，全てが台無しになるから。 ・酒造りにかけると誓ったから。 ○　酒造りがうまくいかないのは，水が違うことを知ったとき，どんな気持ちになったでしょう。 ・失敗をする原因が分かったぞ。 ・軟水に適した方法を考えよう。 補発：「どうして百試千改でがんばろう」という気持ちになれたのだろう。 ◎　「軟水による改良醸造法」を完成させたとき，仙三郎はどんな気持ちだったでしょう。 ・あきらめずに続けてきてよかった。 ・これでおいしい酒が造れる。 ○　広島杜氏は，なぜ誕生したと思いますか。 ・仙三郎があきらめずに努力して新しい醸造法を完成させたから。	○　その場の状況が分かるように，場面絵と説明の短冊を示しながら読み進める。 ○　仙三郎の志を確認し，やめるという方法を選ばなかった気持ちを考えさせる。 ○　灘の硬水と広島の軟水の違いを理解させるために，軟水と硬水を実際に飲ませる。 ○　改良醸造法を完成させるまでの努力を短冊を使って提示し，状況把握をさせる。 ☆　仙三郎の生き方を自分自身とのかかわりでとらえ，自分なりに思考を深めることができたか。 ○　仙三郎があきらめていたら，広島杜氏は誕生していなかったことをおさえる。
	３　自分を振り返る。	○　あきらめずにがんばって良かったことはありませんか。どんな気持ちでしたか。 ・水泳で記録が出ずあきらめかけたけど，努力をし続けて標準記録を突破することができた。続けてよかったと思った。	○　出てこなければ，日記などであらかじめ用意したものを紹介する。
終末	４　心のノートに考えたことを書く。	○　心のノートP.16を開けましょう。	○心のノートP.16を読み，夢について書かせる。

（オ）資料分析表

[illegible]	[illegible]		[illegible]		[illegible]
	[illegible]	[illegible]			
[illegible]	[illegible]	[illegible]	西条の道造りに興味を[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]		[illegible]	仙三郎の努力を調[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	仙三郎の[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

（カ） 板書例



【板書の構成】

板書では，児童になじみの薄い「酒」について，解説を加えながら丁寧におさえていくようにした。まず，お酒の造り方である。米と水と麹菌を混ぜ，発酵させて作ることをおさえた。また，西条が灘，伏見と並んで日本三大銘醸地であることもおさえた。この２点を板書で示すことで，本資料の中で重要となるポイントをおさえた。

次に，仙三郎が活躍した時代の背景を簡単におさえ，酒造りに力を注ぐようになっていく心情を児童の発言をもとに整理していった。その時に，場面絵も効果的に配置し，適時提示しながら進めた。

さらに，水の違いを飲み比べさせながら，板書にポイントを書き，児童が思考を深めるときの助けになるようにした。

中心場面では，吹き出しを用いて，仙三郎の郷土を思う気持ちが表れるようにした。

（キ）ワークシート

道徳　年　月　日　組　名前（　　）

「硫酸イオン改の苦労」

◎「軟水による改良醸造法」を県内の同業者に配ったのは、どんな気持ちからだとぼくは思ったのでしょう。

◎今日の学習で学んだこと、大切だと思うことを書きましょう。

（２）活用のポイント

本資料の特性は，酒造りにかけた人物の生き方を通して，郷土への想いを深めるところである。児童にとってなじみの薄い「酒」という素材を酒の造り方や酒祭りの様子，実際に水（硬水，軟水）を飲ませるなど児童に身近なものをから入ることで，少しでも酒に興味をもって資料に入れるようにしたい。

また，難しい専門用語もたくさん出てくるので，そのたびにわかりやすい解説を入れながら資料を読み進めることも必要である。本資料は，三浦仙三郎がおいしいお酒を造ることができなかった軟水を使って，おいしいお酒を造る方法を考え出すまでの努力が中心となる。しかし，これではねらいとする郷土愛の価値へと向かうことは難しい。そこで，主人公を第三者の「ぼく」とし，「ぼく」の目を通した仙三郎の生き方から郷土愛の価値へ向かう資料とした。そして，自分自身に関する視点（努力）から集団や社会とのかかわりに関する視点（郷土愛）へと児童の思考を転換させるために，資料後半部分に「県内の同業者に改良醸造法をまとめた本を無料で配布した。」という場面を設定し，児童に「20 年以上かけてようやく完成した方法を教えるのか」という思考を転換し，考えを深めるポイントを提示した。この場面設定により，児童の思考は，自己の努力から郷土愛へと変わっていくことができると考える。

ア　発問の工夫

第三者の主人公「ぼく」の視点で，仙三郎の気持ちを問うことで，主人公「ぼく」が郷土について想いを深めていく心情を考えさせる。

イ　書く活動を生かす工夫

中心発問では，仙三郎の行動の裏にある思いをじっくり考えさせるため，ワークシートを準備した。書く活動を展開後段の主人公「ぼく」が郷土について考える場面で生かしていく。

ウ　体験活動を生かす工夫

軟水と硬水といわれても，児童にとってはどう違うのかがよくわからない。そこで，軟水は酒蔵の地下水（硬度 30）を，硬水は市販の硬度の高い水（硬度 1300）を用意し，授業の中で実際に飲み比べさせる。

（３）授業の実際―児童の実態を踏まえて―

ア　発問の工夫

導入では，「酒はどうやって造るのだろう。」と聞き，なじみの薄い酒について興味をもたせるようにした。

・「米，水」「分かった，アルコール。」
・「ああ，納豆やヨーグルトと同じだ。」

児童は，水と米，そして麹菌の働きによって酒になることを知り，その不思議さに驚きながら資料の世界に入っていった。この導入が資料の内容と深くかかわることへの伏線にもなる。また，水と麹菌の関係が酒造りに決定的なものであることをとらえ，いかに三浦仙三郎の努力が大変なものであったかを感じさせることができる。

第一発問の「売れなかったとき」という発問では，「もうやめよう。」という気持ちと「何とかおいしいお酒が造りたい。」という揺れる気持ちをとらえさせ，そこからどうして開発への努力に向かったのかを考えさせた。

・もうやめよう。
・何とかして売れるようなお酒を造りたい。

この時点では，「売れるお酒を造りたい。」という考えの児童が多く，これは小学校高学年という時期にある児童の実情なのだと感じた。

第二発問の「軟水による改良醸造法を完成させたとき」という発問では，まだ，児童の思考を「仙三郎の 努力が実を結んだ。」という１－（２）不撓不屈の視点にとどめた。そして，次の中心発問で，児童の思考を一気に郷土愛へと転換させる伏線としていった。

・あきらめずに続けてきてよかった。
・これなら売れる，灘にも負けない。
・やればできるじゃないか。

やはり，仙三郎の努力が児童の意識の中に強く，このような反応になったと考える。

第三発問が中心発問で，「全財産を費やし，20 年以上もかけて開発した改良醸造法をみんななら どうする。」と問いかけ，児童の「自分がこれまでとても苦労してがんばってきたのだから他人には教えない。」という考えと仙三郎の「無料で県内の同業者に配った。」という考えを比べて考えさせ，

「どうして仙三郎は配ったのだろうか。」と問うことで，児童は仙三郎が自分のことだけでなく郷土の発展に尽くしたいという気持ちでいたことに気付いていった。

初めは，次のような反応が多かった。

・何でそんなことしたの。
・「自分だったら絶対に教えない。

しかし，「でも，仙三郎は配ったんだよね，それも無料で配ったんだよね。」という補助発問をすることで，児童は深く考え，

・広めたかった。
・広島にはおいしいお酒がないと言わせたくなかった。
・県内においしいお酒をいっぱいにしたい。

という反応となった。ここで児童の思考は，「努力」から「郷土愛」へと転換していったと考える。

第四発問の「煙突から立ち上る煙を見ているとき」では，「かつて，仙三郎さんが無料で県内の同業者に軟水による改良醸造法を配ったおかげで，今の酒造りがあるのだな。」という主人公の内面から湧き上がる思いを，場面絵を効果的に活用し感じとらせていった。

・誇りに思う。
・大切にしていきたい。
・酒祭りにも行ってみたい。

という児童の反応から，郷土に誇りをもち，郷土の伝統や文化にふれたいという気持ちが高まったと感じた。

イ　書く活動を生かす工夫

中心発問（第三発問）は，ワークシートを活用し，じっくり時間をとって考えさせた。次に示すのは，児童の反応である。

・広島全体を酒で有名にしたいし，20 年かかったからこそ配ったと思う。
・軟水でおいしい酒は造れないと思い込んでいる人に，本当は軟水でもおいしい酒を造れると教えたい。
・自分も最初はすごく苦労したから，今，困っている人の気持ちがわかる。だから，教えてみんながいい気持ちになってほしい。

このように，児童は仙三郎の郷土を思う気持ちを主人公「ぼく」を通して感じていた。

ウ　体験活動を生かす工夫

努力を開始した後，ある講演会で「水の違い」について知ることになるが，ここで出てくる軟水と硬水が分かりづらいので，実際に軟水と硬水を準備し，飲ませることでその違いに気付かせた。

児童は，飲み比べることで軟水と硬水の違いにすぐに気付き，水として飲むとおいしく感じない硬水は，発酵力が高く，お酒造りに適していることや普段飲み慣れている軟水は，お酒造りには不向きであることを知ることができた。こうすることで，お酒造りには不向きな軟水を使っておいしいお酒を開発した三浦仙三郎の郷土への強い思いを感じることができたと考える。

（4）各教科等（体験活動を含む）との関連

実際に酒蔵へ見学に行き，聞き取りをすることが可能である。こうすることで，資料の主人公と同じ体験をすることができ，資料の世界を肌で感じることができる。また，総合的な学習の時間や社会科と関連させて，酒造りの歴史や発酵の仕組みを調べる学習に発展させることもできる。さらに，酒祭りに参加し，地域の酒造りに対する熱い思いを肌で感じ，実際に酒蔵どおりを歩いて，主人公が最後に赤レンガの煙突から立ち上る煙を見て考える場面を体験するとより資料の中に入り込んで，郷土についての想いを深めることにもつながると考える。

（5）心のノートの活用

事前に「心のノート」PP. 104-105 の「わたしのふるさとしょうかい」でふるさとについて今の思いを記入させることは効果的である。学習後に再度振り返ることで，自分の思いの変容を確かめることができる。

また，事後にPP. 106-107 の「伝統や文化を自分の生活や将来にどのように生かすことができるだろうか。」に思いを書かせることで，語り継ぎ，受け継ぐ伝統や文化について考えさせる等の活用ができる。また，P. 124 にこの授業を通して考えたことを記述することで，自分を見つめ直す時に活用することができる。